

加齢を超えた 華齢なる音楽祭

福島茂喜 (高12回)

2013年9月22日の午後4時半近く、飯田市鼎文化センターのステージで、休憩を挟んで3時間を超える音楽祭が、幕を下ろそうとしていました。

題して「華齢なる音楽祭」。会場を埋め尽くした600人近いお客様の前で、実行委員長の私は感極まってお礼の挨拶もしどろもどろでした。

東京発「華齢なる音楽祭」が 故郷・飯田で受賞？

「華齢」というのは見慣れない言葉なので、新聞などではよく「華麗」と間違われました。じつは「加齢」のもじりで、要するにお年寄りの音楽祭です。

最初は「加齢なる音楽祭」でしたが、「加齢臭」のするような名はいやだと、女性たちからクレームが付き、華やかな齡の「華齢なる音楽祭」に落ち着きました。

歯漏れ音でハモれる加齢なる歯ーモネー

この企画の原点は、東京で20年も前に始まった「懐かしい歌いい歌を歌わまい会」という集まりでした。

飯田高校・昭和35年卒の東京三五会のメンバー20人前後が年4回、新宿区四谷のカラオケスナックで夜更けまで好きな歌をうたっていました。

あるとき、飯田市立追手町小学校が、昭和31年のNHK合唱コンクールで優勝した課題曲「わかいおじさん」を口ずさんでいると、店の女主人が言いました。

「どうしてこの歌を知っているの？ 私が小学生のとき合唱コンクールで負けた悔しい歌なんですっ！」

そこで、古い録音を探し出して聞かせると、彼女は完全に降参して、「これもご縁。会場提供で精一杯協力します」と言ってくれました。

このエピソードは同時に、今までカラオケ三昧だった「歌わまい会」に合唱への関心を喚起しました。

当時すでに60代後半の加齢世代。歯は隙間だらけで、歌ってもスースーと歯漏れ音ばかりです。それでもこの「歯漏れ音でハモれる加齢（華麗）なる歯ーモ無（ネー）ー（ハーモニー）」を合言葉に、始めたのが「華齢なる合唱団」でした。



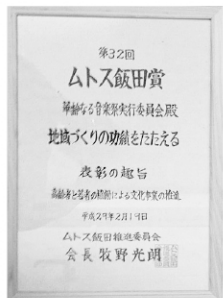
●ふくしま・しげよし
飯田市川路出身。光文社、ごま書房などで出版に携わり、多湖輝「頭の体操」、池波正太郎「男の作法」などを手掛ける。最近では五木寛之「こころの相続」で編集協力。「華齢なる音楽祭」を企画、第7回まで実行委員長を務める。

60歳以上を参加資格とするこの音楽祭は、「お年なの」と言わせない、むしろ「お年だから」こそこの加齢を超えた「華齢パワー」が売りものです。

音楽なら、楽器演奏でもコーラスでも、洋楽でも邦楽でも、何でもありのごちゃませイベントですが、2013年の第1回以来、2019年の第7回まで、回を重ねるごとに、なぜか飯田の老若男女の熱いご支持が増え続け、立ち見の出る大盛会を続けています。

2017年には、飯田市から優れた市民活動に与えられる「ムトス飯田賞」

という栄えある賞をいただきました。「ムトス」とは、「何かをやらむ」という意欲ある活動を指す言葉だそうです。



2017年ムトス飯田賞の賞状

個人的なことですが、私は中学で音楽を教わった宮内宏先生（高2回・故人）に、音楽好きになる決定的な影響を受けました。先生は、80歳近くなるというのに矍鑠として、郷里で音楽指導に励んでおられました。

この際、思い切ってもう一度先生の指導を仰ぎたい。そう思って東京の仲間を誘い、飯田の仲間と夏合宿をして、先生の指導を受けることにしました。

その後は、すっかり先生に甘えてわがままを言いました。歌いたい歌も、いわゆる合唱定番曲だけでなく、AKB48の「桜の葉」や、素人には無謀といわれたドラマ『坂の上の雲』の主題歌「Stand Alone」なども、先生が苦心惨憺して編曲・指導してくださいました。

先生の指導は厳しいところはありましたが、基本的には我々の希望を入れてくれました。お堅いことは言わずに、歌うことを楽しむ。これが何よりの原点でした。

お年寄りが輝く主役、若者がサポーター

宮内先生は長年、飯田のシルバーコーラスの指導をなさっていて、ピアノ教師の奥様ともども、飯田の音楽グループの情報に通じておられました。

飯田には、70、80はおろか90歳になっても音楽を楽しんでいる人が多く、元氣だから音楽ができるのか、音楽

をやっているから元気なのか、まあどちらも本当だろうとおふたりはおっしゃいます。

だったら、と私は思ったのです。年に1度でもそうしたお年寄りの音楽好きを一堂に集めて、お年寄りだけの音楽祭ができないかと。普段はなかなか主役になれないお年寄りが、その日は一番の輝ける主役です。

即座に奥様が、「できるら、それは。絶対できるできる！ すごく素敵なお会になると思うに！」と反応してくださり、先生は、「それなら、市のイベントを広く手掛けている桑原利彦さん（高27回）にお話しするといいでしょ」と助言してくださいました。

桑原さんにお会いすると、にわかに話が具体的になっていきました。イベントプロデューサーとしての桑原さんが、この企画の可能性を見抜き、実行委員会を重ねて第1回の開催に漕ぎつけたのです。

出演団体を募ると希望者はじつに多彩で、第1回はコーラス、マリンバ、大正琴、フラダンス、ハーモニカ、フォークなど12団体に絞りました。第2回以降も、事務局長・小林賢二さん（高12回）の水際立った采配で盛会が続き、観客とともに参加希望者が増えました。3時間に収まる限度の15団体に絞るのに大苦勞でした。

この音楽祭に出演することが、音楽を愛する地元の高ムトス飯田賞の受賞理由も、「高齢者と若者の協働による文化事業の推進」というものでした。

ありがたい反響と資金援助

こうしたさまざまな配慮に支えられ、音楽祭は初回から大きな反響を呼びました。NHKテレビも取材に来て、関東甲信のニュース枠で放映しました。

この音楽祭は単なる発表会でなく、高齢者ならではの技術と音楽性を聴かせるコンサートであり、出演者も観客も途中で退出することなく楽しみ、最後に全員合唱で「信濃の国」を歌います。そんなところも、この音楽祭の他にない特徴だと言ってくれる人もいました。

千葉大学名誉教授でベストセラー『六十歳からの生き方』の著書でもある多湖輝氏は、「この催しはお年寄りの心と体の活性化に大変意義がある。日本中、いや世界中に広めてほしい」と言葉を寄せてくれました。

会の趣旨に賛同し、第3回に特別出演いただいた歌手で日本国際童謡館館長の^{おおぼてるこ}大庭照子さんは、この音楽祭を全国展開したいと言われました。その皮切りに2017年5月、横浜市開港記念会館で「華齢なる音楽祭inよこはま」を開いてくれました。

飯田からも6団体総勢51名が出演し、大盛会でした。

高齢者の励みになっているという声も聞きました。

運営スタッフには最初、実行委員のほか、お年寄りだけの出場者とは逆の発想で、高校生など若者グループにも加わって後

には長野県シニア大学飯伊学部の方々にも、地域活動の学習の一環として協力をいただくなど、老若男女相まみえる年齢差を超えた交流に発展していきました。

回を重ねて、高齢者と若者の協働が密なものになると、高齢者の安心と安全への配慮も強くなりました。高齢者の多いイベントの方が一に備え、2回目からは看護師、3回目から医師も待機してもらい、また飯田女子短期大学の看護学科の皆さんの協力もいただけるようになりました。

大庭さんは今後、山梨、神戸、さらにはハワイ等での開催も検討されているといいます。

リニア中央新幹線開通の暁には、世界大会を飯田でとの夢も、ただの夢ではない気がしてきました。

運営面での最大の課題は資金面ですが、小林・桑原両実行委員をはじめとする関係者の奔走によって、まず長野県の「元気づくり支援金事業」の援助に始まり、多くの賛助会員・広告協力者のご支援と、飯田市の「ムトス飯田支援事業」により運営基盤がつけられました。

ただ、回を重ねるにつれ、公的支援に頼らない自前運営が求められます。参加料・入場料などのご協力や、前回、事務局長が発掘した支援団体からの支援なども含め、幅広い可能性を探りながらも、やはり従来に増す地元関係者の温かい応援があつてこそその音楽祭です。

同窓会の皆さまにも、ここまで見守り育てていただいたことに深く感謝し、さらなる継続・発展にお力添えくださいますよう、お願い申し上げます。

第8回（2021年に延期）からは、単なる言い出しっべの私に代わり、同窓会副会長も務められた矢澤昭彦さん（高12回）が実行委員長を引き受けてくださいました。これですますます音楽祭を通じての「つながるふるさと」も進むことでしょう。楽しみます。



2018年の第6回音楽祭では孫世代との協演がテーマで好評を博した